





エルフの国の女王であるシルヴィアが、一世一代の策戦を成功させ、ダークエルフの国の女王・アウラを捕らえることに成功して、早数日。

捕虜となったアウラの存在を盾に、エルフの国はダークエルフの国との交渉や戦闘を優位に進めていた。押され気味になっていた前線も押し返し始めている。

このまま上手くいけば、再びダークエルフの国を陥落寸前まで持っていくのはそう遠い未来のことではない、とエルフの国の者たちは戦意に湧きたっていた。

全てが順調に進んでいた。

その筈だった。

「まだダークエルフの国からの返書は届かないのでしょうか？」

「向こうも対応に苦慮しているということでしょう。国の主が敵国に捕らえられるなど、想像もしていなかったでしょうね」

「守りを固めるばかりで、攻め気も感じられないようですしね。動揺が手に取るように伝わって来ています」

「いよいよダークエルフもとの長い戦いにも終止符が打たれますね」

エルフの国の重鎮たちは、作戦会議とは思えない朗らかな雰囲気ですんなり言葉を交わしていた。

最大の脅威であるアウラがいらない以上、ダークエルフの国との戦争はもはや勝ったと考

えていたのだ。

作戦会議には、エルフの国の長であるシルヴィアも当然参加していた。だが、重鎮たちと違い、彼女はどこか浮かない顔をしていた。

「……シルヴィア様？」

普段は精力的に意見を出し、重鎮たちからの意見を吸い上げ、次に行く作戦をより良いものとしていくシルヴィア。

そのシルヴィアが、今日は会議の開始を宣言してから一言も発言していなかった。それどころか、心ここに非ずと言った様子で、茫洋と中空を眺めていた。

普段は椅子に浅く腰掛け、背筋もピンと伸ばして、凛とした態度を取っている彼女だったが、今日はその姿勢もどこかぎこちない。

何やらもじもじと腰を動かしている様子もあり、いつもの落ち着きのある彼女ではなかった。

妙に感じた重鎮のひとりがシルヴィアに声をかけたが、気もそぞろな彼女はその呼びかけに反応しなかった。

「もし？ シルヴィア様？」

「……っ！ な、なんでしょうか？」

再度の呼びかけによりやくシルヴィアが反応した。

明らかに会議の話を聞いていなかった様子に、重鎮たちはますます怪訝そうな顔になって、顔を見合わせる。

「シルヴィア様、もしやお体の具合が悪いのではありませんか？」

「そう言われれば、お顔も少し赤くなっているように窥えますね……」

「風邪に利く靈薬をご用意しましょう。たかが風邪、されど風邪と申します。ご自愛くださいませ」

体調不良であろうと考えた重鎮たちは、一斉にシルヴィアを氣遣う言葉をかける。

そんな優しい重鎮たちの言葉に、シルヴィアはぎこちなく笑顔を浮かべて応えた。

「皆様、ありがとうございます。ですが心配は無用です。今後の……ダークエルフの国をどう統治するかについて、少し考えを巡らせてただけですよ」

そのシルヴィアの言葉に、重鎮たちは「気の早いお話ですね」と嫌味なく笑う。

シルヴィアなりの冗句だと皆わかっていたからだ。

その後は、シルヴィアも地に足のついた話し合いに参加し、いつも通りの聡明な意見を述べたことから、重鎮たちの頭からシルヴィアの体調不良の疑惑はすっかり消えてしまった。

しかし重鎮たちがもつとシルヴィアの様子に気を配っていれば、その異音に気付いたかもしれない。

彼女が僅かに腰を動かした際に、粘り気のある水音がしていたということに。

「……っ、ふ……ん、う……っ」

その日の夜。

シルヴィアは人払いを済ませた自室のベッドの上で、その体を悶えさせていた。最低限の装飾品以外、何も身に着けずにベッドの上で寝そべった彼女は、その両手を使って自身の豊満な胸を揉み、股間に指を這わせていた。

嫋やかな白い指先が、股間の割れ目に沿って動く。その動きはぎこちなく、小さく震えており、自ら行っていることにしては、躊躇いや葛藤がその所作からは感じられた。

「は……あっ、う……っ、なん、で……っ、こんな、体が……っ」

頬を上気させ、熱い息を吐くシルヴィア。

その全身からは薄く汗が滲み、細かく震え、体の内側から発生する疼きを必死に抑え込んでいるのが窺えた。

彼女の秘所はとめどなく愛液を垂らし、彼女の腰が置かれているベッドのシーツにシミを作るほどになっていた。

ここ数日、シルヴィアの体はどうしようもなく快感を求めて、強く疼いていた。彼女とて、自慰の経験こそあるものの、ここまでの強い衝動を感じたことは、これまでに一度もなかった。

少なくとも、会議中にまで体が疼くというのは、異常事態である。

「侍医も……っ、魔導士も……っ、何の異常もないと……言っていましたのに……っ」

体が熱っぽいということから、彼女も何らかの病を疑いはしたのだ。

口の堅い城付きの医者や、優秀な宮廷魔導士にも依頼して、体の検査はすでに済ませていた。

しかし、結果はいずれも「異常なし」。

女王としての矜持もあり、「あそこが疼く」などと言った直接的なことは話せなかったとはいえ、もし体に何らかの異常があれば、卓越した知識と技術を持つ彼女たちが気付かないことはありえない。

だがシルヴィアは時を追うごとに体の疼きが強くなり、「気持ちいいことをしたい」という衝動を強く感じるようになっていた。

「んっ……んう……っ、こん、な……はしたない……こと……っ」

眦にうっすらと涙を浮かべながら、自分の乳房や股間を弄るシルヴィア。

はしたない真似をしたくない気持ちは相変わらず強かったが、その場所に指を触れさせると、もどかしい疼きが嘘のように気持ちいい快感に昇華されていくのだから、仕方がなかった。



「発散、すれば……っ、きつと……っ、治まる、はず……です……っ」

そう信じて、シルヴィアは自分の性器を弄り、刺激を加えて疼きを発散させていた。

指で摩るだけでも十二分に気持ちよく、彼女の形のいい乳房の頂点に位置する乳首は、固く尖がってその存在をより強く主張していた。

その尖がって固くなった乳首を摘まめば、どれほど気持ちよくなれるのだろうか。

そんなことを自然と考えてしまったシルヴィアは、激しく鼓動する心臓の音を感じつつ、指でゆっくりと乳首を摘まんでみた。

軽くしか摘まなかつたのに、その衝撃は絶大なものとなった。

「ひゃあ……っ！」

シルヴィアの体は思わずビクンッと跳ね、そ

の動きに伴って彼女の乳房全体がブルブルと揺れる。

そうすると摘まんだ乳首が引つ張られ、余計に強い快感が乳首を中心に巻き起こった。

「ふ、あ……！ んんんっ……！」

強い刺激に大きな声が出そうになったのを、シルヴィアは慌てて噛み殺す。

いくら人払いをしていて、女王の部屋が極端に広いとはいえ、あまり大きな声を上げてしまうと、見回りの兵士たちが異変と思って突入して来てしまうかもしれない。その可能性がないとは言い切れない。

強く唇を噛んで、声をあげるのをなんとか堪えるシルヴィア。

快感の波を耐えきったところで、乳首から指を離し、一端呼吸を整える。

「はあ……はあ……はあ……乳首で、こんなに気持ちいいのなら……こっちは、どうなのでしょう……？」

そう思ってシルヴィアは自分の股間へと指を這わせる。

まだ表面をなぞっただけだというのに、股間からとても強い快感が発生し、彼女の背筋を通して頭までも痺れさせた。

「んひい……っ！ こ、これは……だめ……ですっ」

アウラと貝合わせをした時よりも強烈な快感を覚えたシルヴィアは、慌てて自分の股間から手を離れた。

あまりに強い快感に、空恐ろしくなったのだ。
ベッドの上で仰向けに寝転がり、息を整えるシルヴィア。

「はあ……はあ……でも、少し、マシになりました、ね……っ」

体の疼きは少し治まっていた。

これでやっと眠れる、とシルヴィアは目を閉じた。

ほとんど裸と変わらない、はしたない格好のままだったが、そんなことを気にしている余裕は、いまの彼女にはなかったのだ。

それでその日は無事やり過ごせたシルヴィアであつたが——体の疼きは、日を追うごとに強いものへと変わっていった。

「んう……んんあ……っ、ふうう……っ」

声を殺して股間を弄る。

乳房を揉みしだいて、固くなった乳首を擦りあげる。

その指の動きに迷いはなく、徐々に自慰をする回数も増えていっていた。

「ふあっ、んあっ、んんうっ……!」

枕に顔を埋め、両胸をベッドにこすり付けるようにしながら、両手で股間を弄る。
お尻を突き出して揺らす姿は、とても一国の主とは思えない無様な姿で、そんな自分の姿を想像すると、シルヴィアは死にたくなるほど羞恥を感じてしまった。

「んう……っ、んあっ、あああっ……!」

声が出そうになるのを、枕に顔を押し付けることで何とか凌ぐ。

ビクビクッ、と腰が震え、指先に生暖かい液体がかかる感触がした。

それはいわゆる潮吹き、という現象だったのだが、それを認めるのが怖かったシルヴィアは、直視しないまま手を擦り合わせて引き伸ばし、なかったことにしてしまう。

「はあ……はあ……はあ……全然、治まりません……」

体を捻って仰向けに戻り、自身の体を見下ろしたシルヴィアは溜息を吐いた。

その息が自分の体に、胸にかかり、その熱い感触にまた体が疼き始めてしまう。

彼女は毎晩自慰をするのが当たり前になってしまっていた。

それだけではない。日中の政務に差し障りが出るほどに、彼女の体はどうしようもなく

疼くようになっていた。

酷い時には朝の湯あみの前にすることもあったし、日中どうしても我慢出来なくなった時には、こっそり一人になれるところで自慰を行ってしまっていた。

そのために政務に集中できず、ダークエルフの国との交渉なども遅々として進んでいなかった。

重鎮たちは最大の障害であるアウラを排したのだから、張っていた弓の弦が緩んでしまっても仕方ない、と好意的に見ていたが、シルヴィアは自身の不甲斐なさに恥じ入っていた。

「早く、進めなければ、なりませんのに……！」

女王としての責務に焦る彼女だったが、そんな彼女の気持ちとは裏腹に、体は快楽を求めて疼き、指はそれを満足させるために性器を弄ってしまう。

そうしているうちに、彼女の乳房はすっかり刺激に敏感になってしまっていた。日中もなるべく分厚い布の服を着るなどして、対応しないといけなくなっていた。

刺激が生じるとそういう気分になってしまうことが多いためだ。

そして、股間。

シルヴィアは最後の防衛線として、指を大陰唇の中、膣道に挿し込むのを我慢していた。内側まで弄り始めると、どこまで自制が利かなくなるのかわからなかったからだ。

この数日で、外側への刺激だけでも、彼女の下のはきは愛液という名の涎を垂らすように

なっており、その内部まで弄るとどうなるのか、彼女自身予想がつかなかった。だがそこを弄ればいままですの、強烈な快感が得られることは間違いない。

「……ふーっ……ふーっ……ふーっ」

荒い呼吸をしながら、シルヴィアはそっと自分の秘所に指先を宛がう。

そこはもうすっかりドロドロになっていて、彼女が軽く秘所に指先を宛がっただけでも、わずかに指先が秘部の中に潜り込むほどになっていた。そこまで入ってしまえば、もはや自制など利かない。

「ん、うう……っ！ ふあ、あああ……っ！」

まるでシルヴィアの意味ではないように、指先が彼女の秘部に突き立ち、中へと滑り込んでいく。

奥まで挿し込むのは最後の理性でなんとか留めたシルヴィアだったが、中途半端な挿入でも、十全に準備の整ったシルヴィアの性器が快感を得るには十分な刺激だった。



「ひあつ、んああつ、ひいあああつ……!!」

激しい快感の渦がそこを中心に巻き起こり、シルヴィアの全身へと伝播していく。

乳房を握っていた手に思わず力が籠り、自分の乳房を握り潰す勢いで揉んでしまった。

本来なら痛いだけのその刺激も、秘部からの快感に痺れたシルヴィアの頭は気持ちいいものだと思ってしまう。

大きな喘ぎ声を上げなかったのは、ほとんど奇跡と言えるだろう。

強烈すぎる快感が、逆に彼女の喉を圧迫し、呻き声程度で抑えることが出来た。

暫く仰け反って快感に耐えていたシルヴィアは、快感の波をしのぎ切って脱力する。

「はあ……はあ……はあ……やっぱり、おか、しい、です……っ」

彼女の感覚でいえば、どれほど体が性的に疼こうと、これだけ盛大に絶頂したのであれば、数か月は疼きも治まるはずだった。

しかし今の彼女の体はそうではなかった。

絶頂し、発散したはずの直後でさえ——体の奥が疼いて仕方がなかったのだ。

いくら仇敵を捕らえ、気が緩んだからと言っても、ここまで体が疼いて仕方がないのは、自分自身の理由だけではない何かがある、そう考えるのは自然だった。

そしてシルヴィアはまさにその思考の中で、アウラのことを思い出した。

「そう……です。そういえば……わたくしの体がこんなにも疼くようになったのは……あの者と体を……重ねてからです……！」

アウラに何かがある。

そうシルヴィアは感じたのだ。

「ようやく気付いたのか。待ちくたびれるところだったぞ」

そして案の定、一週間ぶりに顔を合わせたアウラは、牢屋を訪れたシルヴィアの顔を見るなりそういった。

その言葉を受け、体の疼きにアウラが関係していると判断したシルヴィアは自分の考えが正しかったことを確信する。

怒りが湧き上がってきたが、それをなんとか抑えつつ、シルヴィアは牢屋の様子を見て眉を潜める。

「あなたは……随分と、快適に過ごしておられるようですね」

牢屋で囚われの身であるアウラに対し、本来それは皮肉として使われる言葉であった。しかしアウラは現在、手枷も足枷も外され、簡易ではあったが寝るのにさほど支障はなさそうなベッドの上に悠然と腰掛けていた。

いくら脱走の可能性がなろうと、手枷と足枷は外すことはないはずのもので、ベッドに至ってはそんなものを持ち込む許可を出した覚えがなかった。

「人質の扱いもわかっていないようだったから、懇切丁寧に教えてやっただけのことよ。なあ？」

そうアウラに同意を求められた看守たちは、シルヴィアの手前か、気まずそうに視線を逸らした。

シルヴィアはいつのまにか看守を手懐けているアウラの様子に顔を顰めつつ、看守たちをその場から下がらせた。

そして、二人きりになったところで、アウラを睨みつけながら改めて口を開く。

「あなたは――」

「どうやら気付いたようだが、原因である妾のことも思い出せないくらい、己の穴を穿るのに夢中だったのか？」

「……っ！」

シルヴィアが何かを言う前に、アウラは先んじて挑発の言葉を繰り出してきた。

そしてその言葉は見事にシルヴィアに突き刺さり、シルヴィアは言葉に詰まってしまう。何よりもその挑発が事実であるということが、彼女の羞恥を掻き立て、心を苛立たせることだった。

ニヤニヤと性質の悪い笑みを浮かべるアウラを睨みつけながら、シルヴィアは何とか言葉の絞りを出す。

「……すぐに、わたくしの体を元に戻しなさい」

「ふふん。貴様の体がどうしたというのだ？ 妾には心当たりがないのう」
「そんなわけがないでしょう！」

滅多に声を荒げることにないシルヴィアだったが、この時ばかりは冷静さを欠いて声を荒げた。

怒りで体を震わせるシルヴィアを、アウラは九割の侮蔑と一割の哀れみを込めた目で見ていた。

「貴様が無思慮に妾と体を重ねるのが悪いのだ」

「なにを……！」

「ダークエルフの女王には『淫堕の呪い』という、貞操を守るための結界が施されておるのだな」

それは妾の大陰唇に触れた者に対して発動する呪いだ、とアウラは告げる。
さらに彼女はシルヴィアにとって信じがたい言葉を口にした。

「本来なら貴様に対しても発動せぬ呪いよ」

「な……！？ どういうことです！」

「簡単なこと。無暗矢鱈に触れるもの全てを呪っておつては、愛してくれる者まで呪ってしまうだろうが。だからこの『淫堕の呪い』はな——己の欲望をぶつけようとした者に対して発動するようになっておるのだ」

聡明なシルヴィアはその呪いの条件が意味することにすぐ気付き、赤面する。
そんなシルヴィアの様子を楽しむように、アウラはあえて言葉を重ねた。

「そう。この呪いは相手のことを考えずに、己が気持ちよくなろうとして触れてくる者を呪うのだ。つまり貴様は——尋問などと嘯いておきながら、実のところ自身が快樂を得た

いと考えていた、ということよ」

「ち、ちがう、違います！ そんなことありません！ ダークエルフのあなたたちとは、わたくしは違います……！」

必死になって否定するシルヴィア。

そんなシルヴィアに向け、アウラは今度こそ完全に哀れみを込めた目線を向けた。

『淫堕の呪い』が発動している以上、虚しき言葉よな

「ぐう……！」

条件を鑑みれば、シルヴィアが自身が快楽を得ようとして、アウラとの貝合わせを行ったのは否定しようもない事実だった。

しかし仮に普段通り冷静なシルヴィアであつたら、気付いていたかもしれない。

アウラが呪いについて正直に話すという保証はどこにもなく——そして実際、この時のアウラは巧妙に嘘を混ぜて呪いのことについて話していた。

体の疼きをなんとかしなければ、と焦っていたシルヴィアはアウラの話術に絡めとられ、流されてしまっていた。

「……呪いを解く方法は？」

「妾がそれを素直に教えると思うか？ 教えて欲しければ、そうさな……交換条件と行こ

うではないか」

「……とりあえず、聞きましょう」

こうしてアウラはまんまと、シルヴィアに条件を突き付けることに成功した。

「なに、いますぐ妾を解放せよ、などという無茶は言わん。ただ、ここは埃っぽくて敵わんのでな……仮にも王族であれば、客間くらい用意しておるだろう？　そこに移してもらおうか」

「………っ、そんな、こと……っ」

「出来ぬのであれば、解呪もなしだな」

そういつてベッドに寝転び、アウラはわざとらしくシルヴィアに背を向ける。
ジユクジユクと疼くあその感覚に、シルヴィアは唸った。

背に腹は代えられない、と。

「……わたくしが呪いにかかったことは、誰にも、決して他言無用です。その条件も飲んでもらいます」

「ふむ……まあ、よかろう。清廉潔白、清楚の代表といえるはずのエルフの女王が、妾に欲望を露わにして襲ってきたなど、噂話としても信憑性に欠けるからのお」

シルヴィアを煽ることは忘れないアウラであった。

羞恥と屈辱に顔を赤くするシルヴィアは、声を荒げそうになるのをなんとか堪え、アウラに向かって言う。

「客間の準備はすぐにさせることを約束します。それで……呪いはどうすれば解けるのですか？」

「なに、簡単なことよ。貴様もすでに実感しているのではないか？　自分で慰めれば、一時的にでも呪いが和らぐということを。つまり……」

「つまり……？」

アウラが本当のことをいう保証もないまま、シルヴィアは重ねて彼女に問いかけてしまっていた。

シルヴィアは完全にアウラの術中に嵌ってしまっていたのだった。

「妾が自分の意思で、貴様を慰めてやれば——呪いは解呪されていくのだ」